木村文助研究

通信　17号　　2008・5・1

文助は「村を育てる学力」を中心に

京都市岡屋昭雄さんより便り

「木村文助研究」通信16号ありがとうございました。木村文助の作文（綴方）の実践は村を育て、親たちを育て、生き方を育てる実践だったのです。

そのためには青年団の若者を育てたり、親たちを育てたりしたのです。大野では親や青年をかえ、農業を育てることもしました。大野の次の学校では漁業のこともしました。

「村を育てる学力」、が中心にあります。親がかわらないと子どもが育たないことも文助は知っていました。それ故に親たちは文助をいやがった面もあります。

今の教育で大切にすべきことを文助の時代にしたことすごい、と思います。今大切なことを当時していたのにはびっくりです。合掌

岡屋さんには2002年、京都仏教大教授でわざわざ大野まで来てくださり講演していただきました。

二〇〇七
一一・一　「木村文助研究」通信No.16発行
一二・一　函館ゆかりの人物伝「木村文助」（ステップアップ・函館文化・スポーツ振興財団ニュース）

二〇〇八
一・一五　「村の子供」（コピー本）作成
一・一七　蛎崎孝市議来館
一・二七　「資料館（赤い鳥・木村文助コーナー）」来館・昭和のくらし博物館（東京）小泉和子館長及び国立歴史民俗博物館（千葉）玉井哲雄教授
一・二七　「郷土資料館」フォーラム・公民館
一・三〇　山本正宏市議来館
二・一五　「綴方生活　村の子供」復刻（函館新聞）
二・二七　「村の子供」復刻版製作（北海道新聞）
三・一五　長万部小長田教諭来館
三・二三　北斗市教育広報「きらめき」No.8発行〈赤い鳥に載った郷土の作文〉教育課　八木橋直弘氏
三・二九　苫小牧佐藤昭子氏来館
四・三　「集録」作成
四・五　大野文保研、一年間の事業を冊子に（函館新聞）

函館新聞　2008年（平成20年）4月5日（土曜日）

大野文保研、1年間の事業を冊子に

木村文助氏の教え子 迎えた講演会も採録

【北斗】郷土の文化財の保護・発掘を行う大野文化財保護研究会（木下寿実雄会長、会員60人）はこのほど、2007年度の事業をまとめた集録を作成した。大野尋常高等小学校などでつづり方の指導に全力を注いだ木村文助氏の没後55年、同氏の著書「村の子供」発刊80周年を記念した一連の事業を紹介している。

同会は節目を迎え、木村氏の教え子を迎えた講演会や展示、居住跡が残る森町視察など年間で記念事業を実施。事業の足跡を1冊にまとめようと、初めて年間集録を作った。

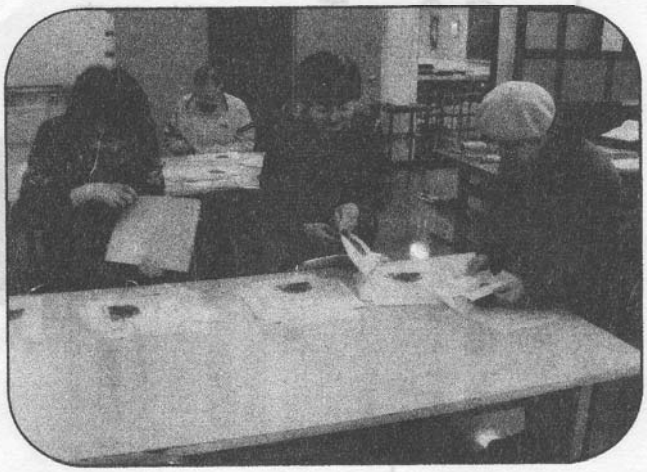
私立昭和中学校（札幌市）で木村氏に学んだ平中忠信さんの講演は6ページにわたり採録した。平中さんが語った当時の木村氏の指導法や教え、足跡を紹介。勤めながら日本児童文学協会支部に所属したり、「社会福祉史」編さんに没頭したりするなど〝書くこと〟を続けた平中さん自身の半生とともに、木村氏をしのんでいる。

木下会長は教え子を迎えた初めての講演会開催に「大正デモクラシーの中でも、まっすぐな方針を持った木村先生の人柄が感じられる」と振り返っている。

A4判14ページ。会員の手作業で100部を完成させた。希望者には市郷土資料館で部数限定で配布している。

（笠原郁実）

2007年度の記念事業をまとめた集録


「集録」を作成する会員

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初めにかけ、童話作家・鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方（作文）や絵などを投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」といわれました。

しかられて（推奨）

大野小尋四　田山みつ

私が昨日学校をかえって、せぼちゃん家のところに遊んでいると、八軒家（稲里の旧名）かい道の方から、めいせん（銘仙＝平織りの絹織物）の着物を着て、めいせんの羽織を着た人が、私の家の馬と同じ馬を二匹つれてきました。私はどこかのばくろ（馬喰）が馬を引っぱって歩いているのだなと思って見ていると、その人がだんだん私の家の方へ近よって来ます。だまって見ていると、私の家の裏の方へ入って行って、馬を私の家の馬屋に入れました。「きっと、これはわしが知らないが、父か母がおぼえている人だな」と思って遊んでいると、おどとがが八軒家道から来ました。そして皆家へ入って行きました。

おどが戸口から顔を出して「み（みつさんのこと）、火たぎつけろ（火を付けて燃やせ）」と言いました。私はきくちゃんと遊んでいたので知らないふりをしていると、「用あるしけ（用があるから）来い」と又よびました。それで私が家にはいって行くと、「このわらし、いちも言うこときがね」と言って、私の頭をがんとたたきました。私が泣くと、又たたきました。姉が「それ、みっちゃ、にげさいの（逃げなさい）」と言いました。私は泣きながら裏の雑倉の後ろに走って行って泣いていると、だんだん日が暮れて来ました。「あやまるがな」と思わさったりしているところに、姉が来て「みっちゃ、家さ行ぐべあ（行こう）」と言ったから、私が「いらねや、おらどこさでも行げていわれだしきゃ（どこへでも行けと言われたから）、ぞぐら（雑蔵）さでも寝るんだもの」と言うと、姉が何も言わないでぐっと行ってしまいました。

私はここにいれば誰かに見られて、きっと「みっちゃがおこられたんだ」と思われると思って、なし床（苗床）の草を取っていると、ががほし物（洗濯物）を入れるに来て、「はんかくせ（半可臭い）、馬鹿って、しかだねもんだなあ、ただかれねくてもいいもの、たたかれて」と言って、ほし物を持って行ってしまいました。私はだれか来てつれて行ってくれればいいと思いながら、裏にいて一人で小さい石をはじいて陣取りをやっていると、きくちゃんが水をまいている音がしたので、私も行って、かなだらい（金盥＝金物製の平たいおけ）をかりて水をまいていると、姉が来て「みっちゃ、今家さ入ねば入れねいよ」と言ったから、私が姉と一しょに家へ入りました。

それでも私が家に上がらないで庭先に立っていると、「み、み、んな（汝＝おまえ）、あやまれ、あやまればゆるす。それでねば、ぞぐらさ寝れ。寝たくねがら（寝たくなかったら）あやまれ」と言ったから、だまっていると、馬をつれて来た人が「みっちゃ、あやまってけるし（謝ってあげるから）来さい（来なさい）」と言ったから、私が上がって行って泣きながら「あやまたァ」と言うと、おどが横座にすわっていて、「それだば（それなら）ゆるす。こんどから、そういうことしたんだら、しょうちしねしけの（承知しないからな）」と言いました。

（大正十四年八月号）

■ことばの意味

【馬喰】牛馬の売買や仲介を仕事とする人。

【雑倉】雑蔵のこと。雑物を入れたり、作業などをする蔵。

【陣取り】子供の遊び。本来は二組に分かれ、互いに相手の陣地を取り合う遊び。

【横座】一家の主人がすわる席。

綴方選評

鈴木三重吉

四年生の田山さんの「しかられて」は、印象的な写出としてすぐれたものです。しかられ、なぐられて、裏手の倉のところで、ふくれかえっているところから、しまいに馬喰の人になだめられてあやまるところまでの、田山さんのふてくされた、しんねり、むっつりした気持ちや動作がまざまざとよく描けていて、ひとりでに微笑されて来ます。ほかのすべての人々も、みんなそれぞれいきいきと出ています。方言のうち「このわらし」は「この子め」、「あやまるがなと思わさったり、ぞうぐらさ寝るがなと思わさったり」は「あやまろうかなと思ったり、それとも、あやまらないで雑倉へはいって寝ようかしらと思ったり」の意味、「はんかくせ」は半可臭いのなまりで、つまり小生意気なという意味です。

風景

大野小高二　小川　勇

（大正十四年八月号）

自由画選評

山本　鼎

小川勇君の「風景」の鉛筆写生も、なかなかいい絵だ。立木など落ち着いてよく見てあります。この学校の静かな画風は、まことに好ましい。

（教育課　八木橋直弘）

赤い鳥・木村文助コーナー

（北斗市郷土資料館内）

０４１－１２０１

北海道北斗市本町２００

TEL（０１３８）７７－６６８１

開館　平日　　８：３０～１７：００

土・日・祝　９：００～１６：００

函館方面→車で、国道２２７号に入り大野市街地へ３０分

道北方面→車で、国道５号の大沼トンネルを抜け、１０分ほど

して大野方向に入って右折し、更に市街地へ進み５分で着く

編集・作成：会報委員会

木下寿実夫、国塚妙子、古俣芳衛、

小松真之、島津晶二

発行：大野文化財保護研究会

（略称：文保研・ぶんぽけん）

会長：木下寿実夫

〒四一－一二〇一

北斗市本町六八

（０１３８）７７・８５３５

旧大野町市街地の大野小学校校門を入り右側の木造の建物